



語り部通信

令和5年度春号（通算第36号）

福井市歴史ボランティア「語り部」

令和5年度新会長とともに始動いたしました！

会長 平野 和夫

目に青葉 山ほととぎす・・・よい季節になりました。
 さて私たちの名称には「語り部」の文字が使われています。類似ガイドには稀なこと。
 そこにプレッシャーも誇りも感じます。昔話、歴史、伝承など、担う世代としては私たちにピッタリです。
 コロナも収束し始め多くの人達と向かい合えるようになりました。
 来春には北陸新幹線福井開業が迫っています。まずは市民の皆さんに語り伝えることを大切にしたいです。
 すね。わかりやすい言葉で聞く人に楽しさが残るように。語り部も市民の皆さんもこそって学び語る、
 それが観光《国の光を観る》に通ずるのでしょうか。
 この5月、旧役員の方の築かれた足跡を大切に新たにスタートです。力を合わせて頑張りましょう。
 皆さんと共に、“夏の夜の・・・雲井にあげよ 山ほととぎす” 伝えていきましょう。
 よろしく願いいたします。

■福井城址 下馬門跡発掘調査会に参加しました



切込ハギが確認されます。打ち込みハギの部分は堀の水面下のようです。



水ぬきの穴も確認できました。
 この暗渠は絵図で判断すると土橋の中心部分にあたるようです

福井城址下馬門の石垣が福井駅前再開発 三角地帯B街区で出土しました。

福井市文化財保護課の白崎調査員から詳細な説明をいただき、土橋・下馬門や石垣の場所が具体的に理解できました。



■ふくい桜まつりでガイド活動



北ノ庄のガイドに加え、福井城址でも待機。来訪する方々に福井城址をご案内いたしました。その前に現地で研修会も開催。学習は怠りません！

■新体制でスタート

令和5年度～令和7年度 役員紹介

- 会長 平野和夫
- 副会長(研修担当兼務) 和田敬四郎
- 副会長(広報担当兼務) 田上啓一
- 研修委員 三好照子
- 研修委員 光照美恵子
- 研修委員 吉岡栄雄
- ガイド委員 高村昭夫
- ガイド委員 桑原晴美
- ガイド委員 松田久美子
- ガイド委員 石倉敏男
- 広報委員 井上満枝



平野会長

■4月6日は城の日

4月6日は城の日です。今年は城の日に福井城址でクイズラリーなど開催いたしました。平日だったため来訪者は少なかったですが、景品を用意してのお城めぐりでした。クイズは語り部と県の交通まちづくり課の担当者の方と一緒に考えて作りました！福井城址を一周できる楽しいクイズです。

また、この日は、富山の歩こう会88名様を4人の「語り部」が足羽神社から西光寺、北ノ庄城址、足羽河原を案内し、「語り部」は息つく暇もないほどでした。

3年ぶりにたくさんのお客様をご案内して、語り部もますます、活動に活気が出ます。



■今年度もグループ勉強会が始まります

今年度も昨年に引き続き、グループ勉強会を行います。昨年からの学習テーマもあり、グループはあらためてメンバーを構成します。また、ガイドコース開拓など新規テーマも増えました。福井の歴史を幅広くお伝えすることになり、ボランティア活動に拍車がかかります。



昨年の勉強会の様子

語り部の活動を紹介しています。

うらのまち「語り部」ふくい



日々の活動の様子や福井の歴史などを紹介しています。



ガイドや歴史講座のご案内 歴naviふくい

「一乗谷朝倉遺跡」「養浩館庭園」「福井城址」などの福井市内の史跡や、ご希望のコースをご案内します。

語り部と学ぶ歴史講座のテーマ名も紹介されています。歴史ガイドの申し込みや歴史講座の講師依頼もこちらへ



YouTubeで紹介



福井の歴史をYouTubeでも発信しています。子ども向けから、奥深いものまで取り揃えています



よもやま話

歴史上の聴覚障がい者

山田 幸代

皆さんは聴覚障がい者と聞くと最初に思い浮かべるのは、3重苦のヘレンケラーさんだと思います。ヘレンケラーの両親は、娘の将来を心配して、ある人に手紙を書きます。その人は聾啞教育（ろうあきょういく）に力を入れていて電話の発明で有名なグラハム・ベルです。ベルがサリバン先生を紹介したのです。

ベルが12歳の時から母親の聴力が落ち、聴覚障がいについて没頭するあまり、音響学を学び始めました。のちに迎えた妻も聴覚障がい者だったために聴覚障がい者教育を進め、聴力計の研究に取り組んでいきました。

さて、日本では誰がいるのでしょうか？戦国の内戦時、「耳が聞こえにくい=人と話せない」ことから「スパイ」として、軍隊の道案内として使われたという話が伝わっています。その他では、吉田松陰の弟「杉敏三郎」は先天的な聴覚障がい者で、話すことができなかったそうです。松陰は敏三郎に絵本を与えました。

文字ばかり読んでも、「どのような場面」で使う言葉なのかわかりづらいと考えたのです。例えば、家族で食事をしている絵に「いただきます」「お母さん、おいしいよ」「ごはん作ってくれてありがとう」という文字が書いてあると、その場のイメージが想像しやすいので、言葉使いも勉強できます。この方法は江戸時代後期に生まれた「谷三山（たにさんざん）」からの助言でした。彼も14歳の時に聴覚を失った中途失聴者でした。彼は、のちに儒学者となり、藩公認の学校を開きました。

皆さんは、長野オリンピックを覚えておられると思いますが、スキージャンプで活躍した人がいます。映画「ヒノマルソウル」は実話ですが、25人のテストジャンパーの中に生まれながらにして聴覚障害を持つ「高橋竜二」がいました。日本が金メダルを期待された団体戦1回戦を終えた時、天候の悪化から2回目を行うかどうかをテストジャンパーにかかっていたのです。25人が全員成功し、その中でも彼は最長を飛び、競技が可能であると証明できたのです。その結果、金メダルを獲得できたのです。

参照 障害者の歴史 江戸・明治・昭和・平成より

（編集後記）

今回のよもやま話を山田さんをお願いいたしました。令和4年度をもち退会されるとのこと。大変残念ですが、山田さん持ち前の原稿をいただき感動！益々のご活躍を！

【発行】

福井市歴史ボランティア「語り部」
（公財）歴史のみえるまちづくり協会